

協働性を育むための「表現」と「鑑賞」の一体化を目指した授業実践

1. はじめに
2. 本校研究について
3. 授業実践
4. おわりに



1. はじめに

「なぜ、『学校』で、学ぶのか？」この問いに対する答えは、多種多様であり、当然、その問いについての正解などないだろう。しかし、敢えて、この問いに、自分なりの「納得解」を求めるとすると、私にとって、ひとつの道標となっているものが、学校は子ども同士で「共に学び合う」ことができる場であるという視点である。子どもたちは学校で多くの「他者」と、目標に向かって一緒に考えたり、お互いの価値観などを、互いに伝え合ったりしながら、毎日を共に暮らしている。子どもたちは、自分以外の「他者」と関わり合いながら生活し、学び合うことで、それまでの自分では、思い浮かばなかったような「新たな考え」や「価値」に気が付いていくことができる。その視点に立つと、学校は、子どもたちにとって、「単なる共同生活の場」になってはならない。学校が、目標・目的を共有し、自己の考えや価値観、そして、感情を交えて、互いに「協働的」にかかわり合える「場」であることが重要となる。そのような日々を積み重ねることができると、教職員が教え込むということはせずに、子どもたち自身が、「新たな価値」を築き上げていくことができる。子どもたち自身が、価値をつくり上げる「学びの場」に出会える「空間」。それこそ「学校」のもつ最大の魅力であると私は考えている。

本提案は、協働的な学びの実現を図画工作科においてめざした実践提案である。その具現化のために、視点を「表現」と「鑑賞」の一体化という点に置き、以下、提案を行う。

本稿の冒頭にあたり、本校の教職員たちの研究姿勢に敬意を評すると共に、日々、学校に通う子どもたちにとって、未来を描く明日への「価値」に寄与するものとなることを願う。

2. 本校研究について

1. 研究テーマ

夢中になって自分の思いや考えを表現できる子を育成する図画工作科学習

～自ら思いをもち、他者の考えを受け止め、粘り強く取り組む子どもの姿をめざして～

2. 本校の考える図画工作の学習

図画工作の学習は、児童が五感を働かせ、自分自身の感性をいかし、身体全体を使い学習することができる教科である。さらに、本校では図画工作の学習を、目の前に表れる児童一人ひとりの「個のよさ」を伸ばしていくことができる教科として考え、図画工作科の学習を、重点研究として取り上げて、研究を進めていく。

3. <研究内容を具現化するための3つの視点>

☆子どもたちと題材との魅力的な出会い（導入・題材・材料・用具の表現方法など）

☆効果的な場（学習環境）の設定

☆子ども同士の対話による共感的学びを支援し、その創出を工夫する

3. 授業実践

1. 実践事例 1 題材名『ひとつのカタチから』（B鑑賞）中学年



本題材はひとつの同じ「形」から、子どもたちひとりひとりがそれぞれ発想を広げて形に描き足していく学習活動である。学習者の全員が「同じ」形から、発想を広げることによって、絵として表されたことの違いに驚く子どもの姿が見られ、他者との発想の違いに面白さを感じているようであった。基になる形が、提示されることで、発想することや構想することが、苦手な児童でも、描き始めることができていた。

児童によっては、紙の向きを変えたり、さらに色を加えたりして、自分の表したいものに近づけようと、徐々に工夫していく姿が見られた。目の前の作品や表現を通して、「みんなちがってみんないい」が体感できる題材となった。



本題材では、学習設定の時期を、4月の図工の授業開きで、行っているという点である。ひとりひとりのイメージの違い、その面白さを授業開きという特別な時間に、他者の造形への興味を引き出したいという願いを込めている。

本題材は、比較的どの学年においても、実施が可能であり、授業の展開自体を学年に応じて大きく変える必要がない題材である。また、画用紙と色鉛筆などの描画材の扱いも簡単であり、技能の差がでない点も良さである。



題材の導入時には行うのは、丸みのある形やギザギザなど、比較的シンプルな形からスタートする。正方形や長方形など、特別に整った形でもよいが、写真のようにどこか一部分が、欠けている形だと、そこから「描き足す」という造形行為が発生し、自然と子どもの発想が広がりを感じることができる。さらに、三つの形を一つの紙の中に盛り込むなど、形に工夫を加えて、子どもの表現が広がりを意図していく。

題材名『みつけて ひろがる 新たな世界』

(B鑑賞) 高学年



(写真①)

本題材は、鏡と画用紙から、万華鏡のように表れる形や色の美しさ・面白さを感じて、意図的に画用紙を配置したり、並び変えたりして、自分なりの新たな世界を生み出す学習活動である。(写真①)

目標は、「鏡に映った色画用の形や色から、感じたり、考えたりしたことを基にして、自分なりの新たな世界を見つける(見方・考え方を深める)ことができる」と設定した。

○題材についてと授業の構想

鏡は私たちの生活の中で、とても身近で便利な道具であるが、生活の使用以外でも、様々な造形にも用いられている。「万華鏡」は、その代表的な一例だ。万華鏡は、内部の鏡によって表れる多様な形や色を楽しむ玩具で、筒状の本体を回転させて、形や色の変化を楽

しむこともきる。子どもたちも、万華鏡の形と色の世界を、身近に楽しんだ経験があることだろう。本題材は、子どもたちがこれまでの経験を生かし、目の前にある形や色から感じたことを基に、自らの手の中で、新たな世界をつくりだすことができるよう学習を試みた。

○学習の構想について

学習構想にあたり、大切にしたい子どもの姿が、「表現すること」と「鑑賞すること」が一体となる学習構想であった。人にとって、表現したり、鑑賞したりする能力は、それぞれ独立して働くものではない。それらは、互いに働きかけたり、働きかけられながら、一体的に高まっていくものである。本題材で子どもたちは、鏡に映った形や色を感じながら、色画用紙を置き直しながら、何度も形や色を変え続けるだろうと想定した。「鑑賞すること」と「表現すること」が呼吸するかのように一体となることで、図画工作科が大切にしている創造性が、より育まれるのではないかと仮定した。

○授業の実際



子どもたちの学ぶ姿から、協働的な学びの具現化と子どもの創造力がどのように発揮されていったのかについて考察していきたい。その具体的な子供の姿として、児童Aを抽出する。まず、授業開始と同時に、Aさんは、鏡の開き具合を、いろいろと試している姿が見られた。Aさんは、何度も試すうちに、鏡を開く角度と台紙の置き方によって、鏡の中央にある形の映り方で形が変化することを捉えたようであった。

やがて、Aさんは、中央の五角形から想像を広げて、細い色画用紙と三角形を組み合わせて、「花火」を「イメージ」して表そうとしていた。

子どもの「イメージ」は、様々な場面で生まれている。無言で何かを思い描いている時や、他者と表しているものを見せ合っている時など、イメージが生まれるタイミングは、千差万別である。



Aさんの場合は、五角形という形を捉えたことを基にして、細長い色画用紙の置き方を変えたり、他者との対話で生まれたアイデアをいかしたりしながら、「花火」というイメージが浮かんできたようであった。「他の人はどんなことをしているのかな。」とそんなことを考えながら、友だちの「表現」を見て歩く姿が見られた。何人もの友達の作品を観て回る内に、ある友だちから「Aさん作品は、花火みたい。」という言葉にであった。そこからAさんは、続い「もっと、花火らしくしたい。」という思いを強くし、鏡に向かう姿が見られた。

自分自身の発想やイメージだけでなく、他者との対話や鑑賞から、「新たな意味」や「価値」をつくりだした瞬間であった。



左の写真が完成した作品である。鏡の中央から、光が伸びるように、細い色画用紙が置かれていた。強い光を表す長方形は、次第に台紙の中央へと広がった。「難しかったけど、楽しかった。最後が一番のお気に入り。」そう語った言葉の中に、自分の成長を感じつつ、新しい価値に出会えた充足感が表れたように感じた。

4. おわりに

本学習の中で子どもたちは、お互いに「できたよ、ちょっと見て!」、「ねえ、これどうかな?」という声をお互いにかけて活動していた。今回の作品が完成した時の子どもたちの「できた!!見て!!」の声も、ひときわ大きく教室に響き渡っていた。

しかし、本当に「できた」のは「作品」ではない。子どもたちが、本当に、できて「見て」欲しいのは、作品を通した「私」なのだ。それは、大人が「ここをもっと塗った方がいい。」などと、与えたような学びからでは生まれない。自らが他者との協働の中で出会った新たな「私」なのだ。

子どもたちが協働的に、かつ自ら、題材や他者と結びついた時、「造形」は、人と人をつなぐ「架け橋」となっていく。その造形を作り出す大切な視点のひとつが「表現」と「鑑賞」が一体化となった学習の構想であった。またその大切さについて考えることができた。